月羽根の少女（ノベル大賞応募版）

プロローグ

六月の朝の柔らかな陽射しがカーテンの隙間から射しこみ、くしゃくしゃになった毛布の上に、光と影のまだら模様を描いていた。

外はよく晴れているようだ。まだ気温はそれほど上がっていないから、ベッドの中が気持ちいい。

「ふわ……ぁ……」

月城（つきたち）さおりは、大きな欠伸をしながら身体を起こした。わずかに茶色味を帯びたセミロングの髪は、寝ぐせだらけだ。

「もう、朝か……」

半分眠ったような目をしてつぶやく。正確には、朝というよりもう昼に近い。

昨夜は遠慮なしの夜更かしをしてしまった。

なにしろ、今日はさおりの通う中学校の創立記念日で、明日は土曜日。

ということは、つまり…

「えへへ～、今日から三連休か～」

無意識のうちに、顔がにやけてしまう。

しかも、ただの三連休ではない。

「ママは旅行で留守だし、思いっきり羽が伸ばせるぞ～」

別に、母親のことが嫌いなわけではない。それでも十四歳の女の子なら、たまには親の目を気にせず、好き勝手にすごしたいと思うものだ。

「んん～っ」

大きく伸びをして、ふぅっと小さく息を吐き出したとき、

バサッ！

背後でなにか、大きな布でも広げたような音がした。

「ばさ？」

首をかしげ、後ろを振り向く。

そこにあったものは――

羽根、だった。

純白の翼。まるで朱鷺（とき）か白鷺（さぎ）のような……。

それが、部屋いっぱいに広がっていた。

幸か不幸か、ベッドの上で身を起こしたさおりの正面には、全身を映せる大きな鏡があった。

鏡に、さおりが映っていた。背中から羽根を生やした姿が。
そう、さおりの背から翼が生えていた。
「羽根を伸ばせるって、比喩的な意味だったのにな……。なにもホントに羽根なんか出さなくたって……」
どこか他人事のようにつぶやきながら、自分の背中を見る。
間違いなく、さおりの背から翼が生えていた。
そのことを確認して。
その事実がようやく飲み込めたところで、
「う〜ん……」
さおりは、そのまま気を失った。

第一夜

（どうして、こんなことになっちゃったかなぁ……？）

西陽が射し込むキッチンで、さおりは声に出さずにつぶやいた。

ここで問題にしているのは、今朝の羽根のことではない。背後を振り返ると、居間のテレビの前で、ゲームに興じている男子の姿が見える。

神山徹（かみやまとおる）。さおりのクラスメイトだ。

親が留守の家に男の子を呼ぶなど、十四歳の女の子としては褒められたことではないだろうが、しかし、徹は別にさおりの恋人でもなんでもない。クラスメイト。特に仲がいいというわけでもない、ただのクラスメイトだ。

なのにどうしてこの家にいて、さおりがふたり分の夕食の支度をしているのか……話は一時間ほど前にさかのぼる。

自分の背中に羽根が生えていることのショックで気を失い、意識を取り戻したときにはもう夕方近かった。

そのときはもう、背中に羽根はなかった。

しかし、絨毯の上に散らばった数枚の羽毛が、あれは夢ではないと物語っていた。

「これって……いったい……」

呆けたようにつぶやいて立ち上がったとき、ぐぅ、とお腹が鳴った。考えてみれば、今日はまだなにも食べていない。いくらずっと寝て……もとい失神していたとはいえ、お腹が空くのも仕方がない。

「こんな時でもお腹が空くなんて、あたしって意外と神経太いのね」

鏡の前でパジャマを脱ぎ、背中を映してみた。そこにはなんの痕跡も残っていない。

「……これなら、問題ないかな？」

そうして、夕食の材料を買いに近所のスーパーへ出かけたところで、偶然に徹と出会ったのだ。

特に親しいというわけでもないが、顔を会わせれば挨拶くらいはする。

「月城（つきたち）、なにしてんの？」

「夕飯の買い物」

そんな、ありきたりの会話までは問題なかったのに。
「もしかして、月城が自分で作んの？」
という徹の言葉から、雲行きがあやしくなってきた。
うなずいたさおりに向かって言った、
「へぇ、月城って料理できるんだ」
という台詞が癪にさわった。その口調には、どこか意外そうな響きがあったから。
「あたし、こう見えても料理は得意なんだからね！」
口をとがらせて言い返す。しかし「こう見えても」と無意識に言ってしまうあたりが少々悲しい。
本人はあまり自覚はないのだが、さおりの外見はどことなく不器用そうな印象を与えるらしい。いまだって、徹はさおりの言葉をまるで信じていない様子だ。
だから、ついムキになって言ってしまった。
「なによ、ウソだと思うなら自分の目で確かめればいいっしょ！　目の前で作ってあげるから、ウチに来なさいよ！」

かくして、さおりはふたり分の夕食を作ることになったのである。別に鈍くも不器用でもないさおりだったが、少々おっちょこちょいであることは自分でも否定できなかった。
（う～ん、やっぱりマズイかなぁ）
スパゲティを沸騰した湯の中に入れながら、さおりは考える。
ついついあんなことを言ってしまったが、考えてみると今夜は家にひとりきりなのだ。親が留守で女の子ひとりの家に、彼氏でもない男の子を上げるなんて……。
ちなみに、さおりはこれまで男の子と付き合ったことはない。どちらかといえばやや奥手な性格だ。
（自意識過剰……考えすぎよね。神山だって、ぜんぜん気にしてないみたいだし）
もう一度、居間を振り返る。
ゲームに夢中になっている徹の姿は、どう見ても女の子の家に上がって緊張しているようには見えなかった。

「へぇ……」
食卓についた徹が、驚きと感心の入り混じった声を上げる。
「思っていたより、ずっとウマイじゃん」
料理は好評だった。
今夜のメニューは、ベーコンとマッシュルームのスパゲティ、鶏肉と野菜のスープ、そしてポテトサラダ。デザートにはコーヒーゼリーを用意した。料理には自信があったが、念のため失敗の少ないメニューを選ぶあたりが意外と用心深い。
徹は、そんなさおりのしたたかさには気付かずに、旨い旨いと料理を平らげる。
おかわりまで要求する徹の姿を見て、さおりはなんだか嬉しくなった。
自分の作った料理を、美味しいと食べてくれる人がいる――そんな、考えようによっては当たり前のことが、さおりにとっては新鮮な体験だった。
さおりが夕食を作ることは別に珍しいことではないが、それは大抵母親の仕事が忙しいとき。とても、今日のようにゆっくりと味わって食事をする雰囲気ではない。
子供の頃からそれが当たり前だったので、別段気にもしていなかった。父親のいない家庭を不幸だと思ったこともない。
だけど、今夜はとても幸せな気分だった。
食事が済むと、徹が食器を洗ってくれた。そんなことしなくてもいいと言ったのだが、「家の手伝いで慣れてるから」と、半ば強引にさおりの仕事を奪う。一見、がさつそうに見える徹がそんなことをするとは、少し意外だった。
徹の厚意に甘えて、その間居間でくつろいでいたさおりは静かに微笑む。こうして誰かが一緒にいてくれるのって、いいかもしれない。
「さ～終わった。対戦の続きをやろ～ぜ？」
洗い物を片付けて居間に戻った徹は、すぐさまゲーム機のスイッチを入れた。さおりはくすっと笑うと、床に置いてあったコントローラーを拾い上げ、ひとつを徹に渡す。
さおりもあまり人のことは言えないが、徹はかなりのゲーム好きらしい。
「言っとくけど、あたしゲームも上手いよ」
「そんな台詞は、俺様の腕を見てから言うんだな」

ふたりはすぐにゲームに熱中する。
流行の対戦格闘ゲームにはじまって、レース、パズル、しまいにはダンスゲームと熱い闘いは続く。
勝率は、六対四の割合でさおりが上だった。よほど自分の腕に自信があったのだろう、徹のあ然とした顔に、さおりはくすくすと笑う。
「あ、やべ。もうこんな時間か」
そろそろゲームにも疲れてきた頃、徹が壁に掛けた時計を見上げた。
既に、午後九時を回っている。
健全な中学生が女の子の家にいるにしては、遅すぎる時刻だと思ったのかもしれない。徹はあわてて立ち上がった。
「俺、そろそろ帰るわ」
「あ……うん」
さおりも立ち上がって、玄関まで送っていく。
楽しい時間が過ぎるのは、どうしてこんなに早いんだろう。
「ところで……」
靴を履きながら、徹がふと気付いたように言った。
「月城の家って、なにか鳥を飼ってる？」
「え、ううん。どうして？」
首を左右に振ると、徹は床を指差した。
（……!!）
一瞬、大声を上げそうになる。
そこには、一枚の羽毛が落ちていた。
純白の羽根……。それがなんであるかは一目瞭然だった。
徹と遊んでる間に、すっかり忘れていたこと。
「あ、あ、え～と……そう、お布団。羽毛布団がちょっとほころびててさ……」
あわててその羽根を拾い上げ、冷や汗を隠しながら言い繕う。
徹は別に気にした様子もなく「それじゃ」と玄関を出ていった。扉が閉まると同時に、さおりはふぅっと大きく息を吐いた。
と同時に、
「あ、そうそう」
閉まったばかりの扉が開く。
不意をつかれて、さおりは飛び上がらんばかり

に驚いた。
「な、な、なに？」
声が裏返っている。
「メシ、うまかったよ。ごちそうさん」
それだけ言うと、徹は扉を閉めた。
あとには、汗びっしょりで赤い顔をしたさおりが残された。

＊

「あ～、びっくりした。バレるかと思っちゃった」
翼のことは、絶対に知られるわけにはいかない。たとえ母親にだって、相談できるようなことではない。
自分の部屋に戻ったさおりは、鏡の前に立った。いつも通りの、見慣れた自分の姿が映っている。
しかし――
目を閉じて、背中に意識を集中する。今朝の、あの姿を思い浮かべる。
目を開けると、純白の翼を生やしたさおりがそこにいた。
（やっぱり、夢じゃなかった……）
衣服の存在を無視したように現れる羽根が不思議だったので、振り返って背中を鏡に映してみる。
それは間違いなくさおりの背中から生えているのだが、注意深く観察すると、翼の根本の一～二センチくらいが半透明に透けていて、服を素通りしているのがわかった。どうやらこの翼、さおりの背中と物理的につながっているわけではないらしい。
「不思議……、まるで魔法みたい」
自分の意志で動かすことだってできるというのに。もっとも、部屋の中ではこの大きな翼をいっぱいに広げることもできない。
「もしかして、これ……飛べるのかな？」
ふと、思いついた。でなければ、いったいなんのための翼だというのか。
（消えて……）
強く念じると、翼はまるで背中に吸い込まれるように消えていく。
さおりの思い通りに操ることが可能らしい。だとしたら、本当に飛べるのかもしれない。

試してみても、損はない。
「……よし！」
うなずいて、さおりは家を出た。
さおりが住む奏珠別（そうしゅべつ）の街は、札幌の郊外にある比較的新しい住宅地である。山を切り開いて造成した街のため、いまでも周囲は自然そのままの山々が残っていた。
街外れにある奏珠別公園まで、さおりの家から歩いて十分くらい。そこはハイキングコースや登山道の入口にもなっていて、少し登ると、街を見おろすことのできる小さな展望台があった。
昼間はそれなりに訪れる人のいるこの場所も、夜にわざわざ来る人はいない。
だから、好都合だった。
明るい月が出ていたので、夜道を歩くのに不自由はない。真円にはちょっと足りない月。多分、明日が満月だろう。
さおりはひとりで、奏珠別公園の展望台へとやってきた。他に人はいない。無人のブランコや滑り台が、少し不気味だった。
公園の柵に寄りかかって、さおりは街を見おろす。
たまに散歩にくることもある場所だが、もちろんこんな時刻に訪れるのは初めてだ。思っていたよりも、街の夜景はきれいだった。
公園の背後に広がる深い森からは、梟（ふくろう）かなにかの鳴き声と、たまにキタキツネの叫び声が聞こえる。
さおりはもう一度、用心深く周囲を見回した。間違いなく誰もいない。そのことを確認して。
深く息を吸い込むと、目を閉じて両腕を広げた。
軽い音を立てて、翼が現れる。
純白の翼は月の光を反射して、まるで真珠のような光沢があった。
「きれい……」
思わず、自分の羽根に見とれてしまう。
初めて、いっぱいに翼を広げた。
思っていたよりもずっと大きい。片側だけで五メートル以上の長さがある。
これだけ大きなものなのに、重さはまったく感じないどころか、翼を広げていると身体が軽く

なったように感じる。
（翔べる……）
さおりは確信した。
空で輝く月を見上げて、トンと地面を蹴る。
ふわり……
軽い羽毛のように、さおりの身体は宙に浮かんだ。
恐る恐る、ゆっくりと羽ばたくと、すぅっと空に昇っていく。
（翔んでる……ホントに翔んでるよ、あたし……）
墜落する不安は感じなかった。羽ばたきの力で浮いているのではなく、この羽根を広げていると、まるで体重がなくなったかのように感じるのだ。
十メートルくらい昇ったところで、水平飛行に移る。
最初は本当にゆっくりと、人が歩くくらいの速度で。そうして、旋回や上昇、下降を試してみる。
思い通りに飛べることがわかって、徐々にスピードを上げていく。駆け足程度から、全力疾走並みに。
慣れてくると、自転車を力一杯こぐよりもずっと早く飛べるとわかった。
耳元で、風がヒュウヒュウと鳴る。
とても、気持ちよかった。
うんと高度を上げて、街の上空に出る。
はるか下に見える、家の灯りや道路の街灯が、月が明るくて星があまり見えない分、まるで眼下に星空があるようだった。
「すごい……すごい……」
空を飛ぶ――その初めての体験に、さおりは夢中になっていた。
重力を無視して自由に空を翔ることが、楽しくて仕方がない。飛びながら、さおりはくすくすと笑っていた。
気持ちいい。
月の光を全身に浴びながらの空中散歩。なんて、幻想的な光景だろう。
さおりは夢中になって、月が西の空に傾くまで飛びつづけた。
東の空が白みはじめる頃、ようやく疲れて地面に降りる。それに、これ以上明るくなったら人に見られてしまうかもしれない。

（……でも、この羽根っていったいなに？　あたしって何者？）

そんな疑問が浮かんだのは、家に帰ってからのことだった。

第二夜

ピンポーン
「……ん……」
ピンポーン
「ん～、誰よ……こんな朝早くに……」
玄関のチャイムの音で起こされたさおりは、不機嫌そうな声でつぶやいた。
目をこすりながら枕元の時計を見る。
「……朝早く……じゃ、ないか……」
もう、とっくに正午を過ぎていた。ベッドに入ったのが明け方近くだから仕方がない。
さおりはベッドから降りると、壁に掛かっているインターホンの受話器を取る。
「……ふぁい、どなた？」
まだ半分眠っているような声を出したが、
『あ、俺。神山だけど……』
受話器からそんな声が聞こえてきて、たちまち目が覚めた。
「えっ？　あ、あの、ちょっと待って！」
受話器を置いたさおりは、大あわてでパジャマを着替える。
（え？　え？　どうして、神山が？）
申し訳程度に顔を洗い、急いで玄関へ向かった。一度大きく深呼吸をして、心を落ち着けてから扉を開ける。
「なんだ、こんな時間まで寝てたのか」
玄関の外では、徹が馬鹿にしたように笑っている。
「……どうしたの？」
まだ状況が把握できていないさおりは、いきなり、紙の箱を手渡されて戸惑った。近所にある喫茶店の名前が入った箱。
「昨日の晩メシのお礼、チョコレートケーキ」
「え、あ、ありがと……」
戸惑いを隠せずに手の中のケーキの箱を見ているさおりに向かって、徹は一枚のＣＤ―ＲＯＭを突きつけた。
「で、こっちが本題。昨日のリターンマッチにきたぞ！」
それは、数日前に発売されたばかりの最新３Ｄ格闘ゲームだった。

＊

結論からいうと、やっぱりゲームはさおりの方が上手かった。夕方近くまで対戦を繰り返して、ようやく徹は敗北を認める。

「くっそ～、勝てん！」

コントローラーを放り出し、さおりが入れたコーヒーを手に取る。さおりは笑いながら、徹が持ってきたケーキを頬ばった。

「美味しい。あたし、ここのケーキ大好き」

「そぉ？　それはよかった」

女の子の家に来るときの手みやげなんて、なにがいいかわかんないから……と徹は言った。

（ということは……こういうこと、普段はしないってことよね？）

なんとなく嬉しかった。理由はよくわからないけど。

「そういえば……」

そんなさおりの心には気づかず、徹はやや遠慮がちに訊いてくる。

「気になってたんだけど……月城の家って、家族は？」

昨日だけならともかく、二日続けてさおりひとりきりとなれば、徹が不思議に思うのも当然だろう。

「ママは取材旅行だって。月に一度くらい出かけるの。まあ、半分は遊びなんだけどね」

「取材？」

さおりの方を見て聞き返した徹は、その背後にある本棚に気がついた。

見覚えのある文庫本が、何冊も並んでいる。

背表紙に書かれた著者名は……

「月城（つきたち）……？」

徹も持っている本だった。

「月城のお母さんて……ひょっとして、小説家の月城みさと？」

さおりがうなずく。

「え～、マジ？　マジ？　今度、サインもらってくれよ！」

「え、まさか……」

さおりは驚いたような表情を見せる。

「神山って……ママの小説のファン？」
うんうんと、徹が大きくうなずいた。
「男のくせに、こんなの読むの？」
意外だった。
月城みさとが書いているのはいわゆる少女小説、中高生向けのファンタジーが中心だ。男性読者が皆無とまではいわないが、読者の大半が女の子なのは間違いない。
「いい本は、性別に関係なくいいんだよ！」
徹はむきになって反論する。
やっぱり意外だった。どちらかといえば、あまり読書などするタイプには見えない。さおりが持っていた徹のイメージでは、ゲームをしているか、あるいは外でスポーツでもしているのが似合っていた。
さおりは母親の著書をすべて読んでいるわけではないが、だいたいの内容は知っている。だから、月城みさとの作風と徹の間には、かなりギャップを感じた。
この徹が、妖精や魔法使いの出てくるファンタジー小説を読んでるなんて……、
「変なシュミ」
身も蓋もない言い方に、徹は顔を赤くする。
「いいじゃんか、別に」
「ま、いいけどね……」
別に徹が少女小説を読んでいたところで、悪いことはない。ただ、意外なだけだ。
「月城みさとがこんな近所に住んでいたなんて知らなかったなー。どうしてもっと早くに気付かなかったんだろう」
月城（つきたち）なんてそう多い姓ではないし、月城みさとが札幌在住であることも知っていたのに、それがクラスメイトの月城さおりと結びつくとは考えもしなかったのだ。
「お母さんが月城みさと……。で、お父さんは？」
「いない」
「え？」
「パパはいないの。あたしが生まれる前に離婚したらしいし、会ったこともない」
内容の深刻さの割には、あっさりとした口調だった。ショックを受けたのは徹の方だ。
もしかしたら、すごく悪いことを訊いてしまっ

たのかもしれない、と。
男くささがまるで感じられない家だということは、少し考えてみればわかることだったのに。
「あ……あの、ゴメン」
「気にしなくていいよ、別に」
実際、さおりは別に気にもしていなかった。
物心ついてからの離婚と違い、さおりは生まれてからずっと父親のいない環境で育ってきた。
それが当たり前のことであり、父親という存在の記憶がないから、自分の家庭環境について特に感傷的になったこともない。
しかし徹はなんとなく居心地が悪くなったのか、わざとらしく時計を見ながら立ち上がった。
「あ、もう晩メシの時間だ。俺、帰らないと」
「あ……うん」
なにか言いかけたさおりだったが、途中で口をつぐんで玄関まで送っていく。
本当は「晩ごはん食べていったら？」と言いたかったのだ。
でも、言えなかった。
恥ずかしくて。

「それじゃ、また」
そういって出ていく徹を、少し寂しそうに見送った。

＊

六月の北海道は、夜の訪れが遅い。
ひとりきりの夕食が済むと、暗くなるのを待って、さおりは昨夜と同じ奏珠別（そうしゅべつ）公園の展望台へ向かった。
また、飛んでみるつもりだった。昨夜の空中散歩は、とても楽しかったから。
今日もいい天気で、東の山の上に大きな月が昇っていた。
今夜は、満月。
公園内に他に誰もいないことを確認して、翼を広げる。
昨夜さんざん飛び回って、翼の扱いにもかなり慣れた。最初の頃に比べると、ずいぶん思い通りに羽根を操ることができる。
地面を蹴った。身体が宙に浮く。

空を飛ぶことは、気持ちよかった。
まるで、この夜空全部を独り占めしているようなものだ。
重力から解き放たれて、たんぽぽの綿毛よりも軽やかに、そよ風の中を漂う。
いまなら、どこまでだって飛んでいける……そんな風に思える。
さおりは小一時間ほど夜空の散歩を楽しんで、小休止のために地面に降りた。念のため翼をしまって、ベンチに腰掛ける。
すると突然、背後から声をかけられた。
「月城……？　こんなとこでなにやってんの？」
びくぅっ!!
一瞬身体が硬直し、それから弾かれたように振り返る。
徹だ。大きなアイヌ犬を連れた徹がそこにいた。
「か、か、神山？」
心臓がばくばくいっている。
胸に手を当てて、裏返りそうになる声を必死に抑えた。
「なにやってんの？　こんな時間に？」
「な、な、なにって、その……」
なにか言い訳はないか、と周囲を見回し、最後にちらりと空を見た。
大きな満月が目に入った。
「あ、あ、あの、散歩よ。ほ、ほら、月がきれいだから……」
どもりながらそう答えると、徹はぷっと吹き出す。
「月城って、意外とロマンチストなんだ」
「い、意外とはよけいよ！　これでも、ファンタジー作家・月城みさとの娘よ？」
徹は軽く笑うとさおりに背を向けて、公園の中を走り回っている飼い犬の姿を追う。他に人がいないので、引き綱を外していたらしい。
（あ～、びっくりした。これって心臓に悪いわ～）
さおりは安堵のため息をつく。
緊張がとけると同時に、急に、鼻と背中がむずむずとした。
「……っくしゅん！」
バサッ！
くしゃみと同時に、翼が飛び出した。

（え？　わ〜、ダメッ！　戻って、早く!!）
さおりはあわてて翼をしまう。
間一髪のところで、徹が振り向くのに間に合った。
「いま、なにかバサッて音が……」
「き、き、気のせいよ、気のせい」
無理に笑ってごまかす。
「月城、くしゃみなんかして……寒いんじゃないの？」
六月とはいえ、北海道の夜はかなり涼しい。
「え、あ、そ……そうかもね。薄着だし……。じゃ、あたしそろそろ帰る……」
なんとかごまかして、この場を立ち去ろうとした。しかし、徹に背を向けて歩き出そうとした瞬間、
（あ……ダメ！　お願い……おさまって……）
願いは通じなかった。
口を押さえたり、鼻をつまんだりする暇さえもなく、
「は……っくしゅん!!」
ぶぁさっ!!
二度目のくしゃみと同時に、また、羽根が広がった。
「え？」
徹が不思議そうな声を上げる。
さおりの動きが止まった。
（……見つかった！　どうしよう、見られちゃった!!）
両手で顔を覆う。身体ががたがたと震えて、羽根をしまうことすらできなかった。
大きな翼はいっぱいに広げられたまま、月明かりに白く浮かび上がる。
（……どうしよう……どうしよう）
頭が混乱して、なにも考えられない。
（見られちゃった、見られちゃった……）
背中に羽根を生やした姿を。
こんな、人間離れした姿を。
それを見た徹がどんな反応をするか、容易に想像できた。
（どうしよう……どうしよう……どうすればいいの……）
徹はなにも言わない。沈黙がかえって怖かった。

この沈黙が破られるときが。
さおりは背を向けているので、徹がどんな顔をしているのか見ることもできない。
振り返ることはできなかった。徹の顔を、見るのが怖い。
脚ががくがくと震え、膝に力が入らなくなって、さおりはその場にぺたんと座り込んだ。
顔を覆った手はそのままに。
血の気の失せた、真っ青な顔をしていることは自分でもわかった。
背後から、足音が近づいてくる。
一歩、二歩、三歩……。
さおりのすぐ後ろで止まる。
（どうしよう……やだ……どうしよう……）
涙があふれそうだった。
ビクッ！
翼になにかが触れて、さおりの身体が小さく震える。一瞬遅れて、それが徹の手だと気付いた。
一層、震えが大きくなる。
……と、
「すっげぇ～！　かっこいい!!」

「……え？」
パニックに陥っていたさおりは、一瞬、徹がなにを言っているのかわからなかった。
それくらい、予想外の台詞だった。
「すげー！　な、これ、ホンモノ？　だよな？　うわ～、すげーなぁ……」
「……え？」
なんだか、予想していたのとずいぶん違う反応……みたいな～？
妙にはしゃいだ徹の声が、まるで幻聴のように聞こえた。
「なぁ、なぁ、これ、ホンモノの羽根？　これってホントに飛べんの!?」
好奇心に目を輝かせた徹が、さおりの前に移動してくる。
それでも、さおりにはまだよくわかっていなかった。
（ふつう、こ～ゆ～状況って……）
もっとこう、気味悪がったり、あたしのこと化け物扱いしたりしないかなぁ？
徹の反応は、このどちらにも当てはまらない。

「な、な、飛べるんだろ、これ？」
「とべる……けど……」
「飛んで見せてくれよ！」
顔全体、身体全体で期待を表して徹が言う。
さおりはなんだかよくわからないまま、のろのろと立ち上がった。恐る恐る徹の顔を見て、それから、翼をいっぱいに広げた。
月の光を反射して、羽毛がきらきらと輝く。
ふわり……
さおりの身体が宙に浮いた。
ゆっくりと一回羽ばたいて、地面から二メートルくらいのところで止まる。
「うわ～、すげ～、ホントに浮いてるよ。なあ、こう、公園の周りをぐるっと一周してみてよ！」
さおりはその言葉に従った。
翼をはためかせ、展望台の周囲を一周して徹の前に着地する。
「すげぇ、すげーや！」
徹は目を輝かせ、さおりの羽根と、空を交互に見る。
（なんて、能天気な……）

この羽根を見て、他になにか言うことないの？
そう聞きたい気もした。けれど訊ねられたところで、さおりにだってなにも答えられない。だから、少しほっとした。
徹の反応に半ば呆れながらも、なんとなく救われた思いのさおりだった。
「……あのさ……頼みがあるんだけど……」
はしゃいでいた徹が、急に口ごもった。
「なに？」
「その……え～と、俺を抱えて飛べないかな？」
「え？」
「……空を飛ぶって、どんな感じなのかなぁって、体験してみたいな～と……」
照れたように、徹は言う。
「神山を？　あたしが？」
「あ、やっぱりダメ？　そうだな、重いもんな……」
ちょっとがっかりしたような徹を見ながら、さおりは考える。
どうだろう、できるだろうか？
「きっと……飛べると思う。あれって、翼のはば

たく力だけで飛んでいるわけじゃないみたいだから……」
言いながら、徹の背後に回る。
「ん～と、こう、かな？」
背中側から徹の胴に腕を回し、腹の前でしっかりと指を組んだ。
「いくよ？」
「え？　あ、ああ」
翼が大きく広げられる。
徹は、身体が軽くなったように感じた。
ふわふわと、水の中にでもいるような。
（ああ、なるほど……）
それで納得する。さおりの言った「翼の揚力だけで飛んでいるわけではない」とはこういうことか。
翼がほんの少し動いただけで、ふたりの足は地面から離れた。
風の中を漂うように。最初はゆっくりと、そして少しずつ速く昇っていく。
「うわぁ……」
徹は歓声を上げた。
気付いたときには、もう、地面から三十メートルほどの高さにいた。学校の屋上よりもずっと高い。
不思議と、恐怖感はなかった。
身体がとても軽くなったようで、さおりに抱えられているというよりも、一緒に飛んでいるように思える。
ゆっくりと高度を上げながら、さおりは公園の周囲を、大きな円を描くように飛翔する。
その円がだんだんと広がって、ついには街の上空に出た。
「すごい……や」
徹は、なんとかそれだけを口に出した。
驚きと感動で、他に言葉が思い浮かばなかった。
風が、静かに頬をなでている。
足下に、街の灯りが広がっている。
空には、月と星。
もう山の頂よりも高く昇っているので、ここには空を覆い隠すものはなにもない。
建物も、樹も、山も、みんな眼下の存在だ。完璧な空が広がっていた。

「すごい……」
もう一度つぶやく。
さおりは、徐々に速度を上げていた。
そうして、いきなりの急旋回や急降下、宙返りで徹を驚かす。
背後で、くすくすと笑う声がした。
「楽しい？」
「うん、すっごく！」
答えながら背後を見ると、さおりの顔が驚くほど近くにあった。
それで気がつく。
いままで、空を飛ぶという初めての体験に夢中になって、まったく意識していなかったことを。
彼はいま、さおりに抱きかかえられていた。女の子と密着しているのだ。
どくん！
急に鼓動が速くなった。
耳元に、さおりの息がかかる。背中に感じる体温と、この柔らかな二つの感触は……。
（月城って、見た目よりも……意外と、着やせする方？）
顔が、か～っと熱くなる。
女の子が、こんなに柔らかなものとは知らなかった。そして、こんなにいい匂いがするなんて。
さおりの髪から漂う、ほのかなトリートメントの香りが、どんな香水よりも強く徹の鼻をくすぐった。
背中を向けているため、顔を見られることがないのは幸いだった。
さおりは、気づいていない。飛ぶことに夢中になっているようだ。
しかし徹は、もう空からの眺めを楽しむどころではなかった。全神経は、その背中に集中していた。
思春期の少年にとって、同い年の女の子の柔らかな感触は、空を飛ぶことよりも刺激的だった。

＊

どのくらい飛んでいたのだろう。
徹のぼうっとした頭には、時間の感覚はなかった。

ふたりが出会ったときにはまだ東の空にあった丸い月は、もう天頂まで昇っている。
ふと我に返ると、公園のベンチに座っていた。隣にさおりが座っている。ややうつむき加減に、自分の足先あたりの地面を見ていた。
その背に、もう翼の姿はない。
徹はさおりの横顔を、ぼんやりと見ていた。
月明かりに照らされたさおりは、とても綺麗だ……と、そう思った。ずっと、こうして見ていたい、と。
不意にさおりがこちらを向いて、反射的に徹は視線をそらした。足下で寝ている、彼の飼い犬を見る。
「遅くなっちゃったね。帰ろうか」
静かな声で言って、さおりが立ち上がる。
明るい十五夜の月がつくり出すさおりの影が、徹にかかった。
「え……あ、うん。そうだね……」
徹はあわてて、ベンチの足に結んだ犬の鎖をほどくと、
「あ……、月城！」

公園の出口に向かって歩き出していたさおりの背中に向かって叫んだ。
「家まで送ってくよ。もう遅いし」
「……うん」
さおりが戸惑いがちに、それでも少し嬉しそうに微笑んだように見えたのは、徹の気のせいだろうか。
ふたりと一匹は、並んで歩き出した。
公園の展望台からの下り路。
公園からさおりの家までの、住宅街の中の路。
ふたりは、ほとんど口をきかなかった。気まずい沈黙ではない。言葉を交わす必要を感じなかった。
歩きながら、徹は横目でちらりとさおりを見る。視線に気付いたさおりが徹を見て、小さく微笑んだ。
ふたりとも、それだけで十分だった。
「送ってくれてありがとう。おやすみなさい」
家に入ろうとしたさおりは、そのときはじめて気付いた。
徹と、手をつないで歩いていたことに。

一瞬目があったふたりは、あわてて手を離す。
ふたりとも、意識していなかった。いつの間にか、ごく自然にそうしていた。赤い顔をしたふたりは、気まずそうに視線をそらす。
「あ……ありがとう。おやすみ」
真っ赤な顔で、うつむいたまま言って、さおりは玄関に向かう。
「あ、あのさ！」
その背中に向かって、徹が声をかけた。一呼吸ぶんの間をおいてから、さおりは振り返る。
「……なに？」
「あのさ、あ、明日……また遊びに来てもいい、かなぁ？」
照れながら、人差し指で頬をポリポリと掻く。
一瞬、驚きと喜びが微妙にブレンドされた表情を見せたさおりは、すぐに微笑んでうなずいた。
「……うん、待ってる」
そう答えると、徹の顔がほころんだ。

＊

（手……つないじゃった……）
自分の部屋に戻ったさおりは、ベッドの上にぽんと身体を投げ出した。傍らにあった大きなクッションを抱きしめて、顔を埋める。
誰もいないのに、真っ赤な顔を隠そうとするかのように。
「神山と、手……つないじゃった」
名前の部分に少しだけ力を込めてつぶやく。
いつまでも、動機がおさまらない。小学生の頃ならともかく、異性を意識するようになってから、男の子と手をつないで道を歩いたことなんてない。
いや、手をつなぐどころか……
「やだ……どうしよう……」
考えてみれば、徹との空中遊泳の間、ずっと彼のことを抱きしめていたのだ。
気付いたのは、飛んでいる最中だった。
徹は空を飛ぶという初めての体験に夢中になっていたし、急に降りるというのもなんだか不自然で、仕方なくそのまま何事もないふりをしていた。
だけど、恥ずかしくて。徹の顔もまともに見れ

なくて。
もしかしたら、胸が当たっていたかもしれない――そう思うと、顔から火が出るほど恥ずかしい。
（だ、大丈夫よね。あたし、特に胸が大きい方じゃないし。だけど……）
「どうしよう……明日、どんな顔をして会えばいいの？」
恥ずかしくて、徹と顔を合わせられない。
でも……会いたい。心のどこかで、そう思っている。
どうしてだろう。
（あたし、ひょっとして……）
ひょっとして……。
「神山のこと……好き……？」
声に出してみると、その確かな想いが胸を貫いた。
（そんな……まさか……）
まだ、よくわからない。いままで、特に親しかったわけでもない。単なるクラスメイトのひとりだった。大勢のときならともかく、ふたりきりで親しく話したのはたぶん昨日が初めて。
（それなのに、いきなり好きになったりするかなぁ……？）
わからない。
わからない。
十四歳の女の子らしい感情として、恋愛に憧れたり、すてきな恋人がいればいいなと思ったりはする。しかし、アイドルや映画俳優に憧れることはあっても、これまで、身近な異性に特別な感情を抱いたことはない。
だから、徹に対するこの感情が本当に恋なのか、さおりにはよくわからなかった。
（だけど……）
徹と話をしたり、一緒にゲームをするのは楽しかった。それは間違いない。
明日も遊びに来ると言ったとき、確かに嬉しいと感じた。
それは間違いないことだった。
（月城って、かわいいな……）
さおりの家からの帰り道、徹の足どりは、どことなくスキップでもしているようだった。

知らず知らずのうちに、顔がにやけてしまう。
いままで、気付かなかった。
クラスの女子のひとり、以上の認識を持ったことはなかった。
成績はいい方。背はクラスの中では低め。どちらかといえば大人しい、あまり目立たない性格。
それが、さおりに対する印象。それだけだった。
（なんだか、いままで思っていたよりもずっと可愛いや……）
さおりとは一年生のときから同じクラスだったはずなのに。たった二日間で、いままで知らなかったたくさんのことに気がついた。
よく笑う。笑うと、もともと細めの目が一本の線になって、口の左側にだけ小さなえくぼができる。
料理が上手で。それ以上にゲームが上手くて。
他に趣味は読書とビデオ鑑賞。好きな俳優はハリソン・フォードとブルース・ウィリス。
話をするとき、口の前で両手を合わせて、首をほんの少し傾げるのが癖。
それから……
（小柄で痩せて見えるわりには、けっこうグラマーなこととか……）
先刻の、背中に当たった柔らかな感触を思い出して徹は赤面する。
異性というものを意識するようになってから、同世代の女の子とあんなに接近したことはない。もちろん、手をつないで歩いたことも。
「へへ……」
さおりの動作のひとつひとつを思い出すだけで、なんだか楽しくなってくる。
（月城って、可愛いな……）
これまで、あまりは話もしたことがない相手なのに……。
好きになってしまった。きっとそうだ。
そうでなければ、こんなにも、頭の中がさおりのことでいっぱいになるはずがない。
明日も会えることが、嬉しくて仕方がない。
「よーし、明日は見たがっていたビデオを持ってってやろ。あと新作のゲームも……」
また、さおりの手料理を食べられたらいいな、と思う。

そして、また一緒に空を飛べたら……
（空を……）
（……あれ？）
（ちょっと待てよ？）
そのときになって、はじめて気がついた。
「んん～？」
腕を組んで、もう一度よく考えてみる。
考えて、考えて……。
ようやく、妙なことに気がついた。そう、そのときはじめて気付いたのだ。
「月城って……なんで羽根なんか生えてるんだ？」
しばらく腕を組んで考え込み、ようやく達した結論は「ま、いいか。可愛いし」だった。

第三夜

鼻歌混じりに、徹は食器を洗っていた。さおりの家のキッチンで。

約束通り、昼過ぎにさおりの家を訪れた。今日はちゃんとさおりも起きていて、午後はずっとふたりでゲームをしたり、ビデオを見たりして過ごしていた。

そして夕方近くになって、さおりがはにかみながら言った。

「よかったら……ごはん食べていかない？」と。

もちろん、徹はうなずいた。ただし、最初からそれを期待していたとはおくびにも出さなかったが。

（……美味しかったなぁ、月城（つきたち）の手料理）

今日のメインディッシュは、じっくり煮込んだビーフシチュー。もちろん手作りの。夕方になってから作り始めて間に合うメニューではない。

つまり、徹が来る前から用意していたということだ。ゲームの途中、何度か一時停止をかけてキッチンへ行っていたのはこのためだろう。

（俺のために作ってくれた料理……）

そう考えただけで、熱が上がりそうだった。

後片付けは自らすすんでやってることだ。もっとも徹は、さおりがわざわざ、洗い物の数が少ないメニューを選んだことまでは気付いていない。

（月城って、料理うまいよな。きっと、いい嫁さんになるな……）

洗剤のついたスポンジと皿を手に持ったままそんなことを考え、思わず赤面する。

（えーい、なに考えてんだ！　まだ付き合ってもいないのに……）

だけど、本当にそうなったらいいな、と。

そんな妄想にひたっていたため、皿の数が少ない割には、洗い物が片づくまでにはずいぶん時間がかかってしまった。

「終わったぞ。さあ続きを……あれ？」

居間に戻ると、ソファの上で横になって、静かに寝息を立てているさおりの姿があった。

ひとりでゲームをしているうちに眠ってしまったらしい。デモ画面が表示されたままで、手にはコントローラーを持っていた。

昨夜遅くまで眠れなかった上に、今朝は早起きして料理の下ごしらえをしたために寝不足だったなどとは、もちろん徹は知らない。
（さて、どうしよう……かな）
さおりは気持ちよさそうに眠っている。起こすのが悪い気がするくらい。
だから、徹は黙って座っていた。さおりの寝顔を、もう少し見ていたかったということもある。
可愛い寝顔だな、と思った。同じ年頃の女の子の寝顔を見る機会なんて、そうそうあるものではない。
なんだか、どきどきする。
うたた寝している女の子の顔を黙って見ているなんて、あまりいいことじゃないのかもしれない。それでも、徹はさおりに見とれていた。
（きれいな脚だなぁ……って、おい！　なにを見てるんだっ！）
いつの間にか顔ではなく、短めのスカートから伸びた脚に目が向いていた。あわてて、さおりの寝顔に視線を戻す。
かすかに開いた口の奥に、白い歯が見える。淡いピンク色の唇は、とても柔らかそうだ。
無意識のうちに、手を伸ばしていた。
ちょっとだけ、触ってみたかった。
恐る恐る、指を伸ばす。
しかし、その指が唇に触れる寸前、
「う……ん……」
さおりが寝返りをうち、徹はあわてて指を引っ込めた。いままで横を向いて寝ていたさおりが、寝返りをうったことで仰向けになっている。
だから……
（あ……）
それまで腕の陰に隠れていた胸の膨らみが、あらわになっていた。服の上からでもわかる、なめらかな曲線を描いている。
ゴク……。
鼓動が大きくなり、徹は唾を飲み込んだ。白いワンピースに、うっすらと下着が透けていた。
（……こら！　どこを見てる！）
そんなとこ見ちゃいけない……そう思いつつも、目を離すことができなかった。
どちらかといえば痩せ気味の、十四歳の女の子

の胸など、実際のところそれほど大したものでもない。しかし、同じ十四歳の少年にとって、その膨らみは抗い難い魔力を秘めていた。
（おいっ！　俺のバカッ！　なにをしようとしてる!?）
心の中で、自分を叱る声がする。それでも止められなかった。
ソファの横に座って、さおりの顔を間近からのぞき込む。大丈夫、間違いなく眠っている。
手が、少しずつさおりの胸に近づいていく。
どくん、どくん。
心臓の鼓動は、その音でさおりが目を覚ますのではないかと思うくらいに激しい。
（わ～っ、やめろ～！　大変なことになるぞ！）
（だけど……こんなチャンス滅多にない……）
（チャンスって……眠ってる女の子に、こんなことしていいと思ってんのかっ!?）
（だけどホラ、こんなに可愛い寝顔してるし……）
（理由になってないぃっっ!!）
心の中で激しい葛藤が繰り広げられている間にも、指は動きを止めない。

指先が触れた。一瞬動きを止め、それから、軽く……とても軽く、押した。
（あ……柔らか……）
手の動きは、それだけでは止まらなかった。いや、止められなかったと言うべきか。
胸の膨らみを、掌ですっぽりと包み込む。
初めての体験だった。赤ん坊の頃の、母親の胸を除けば。
（こんなに、柔らかいんだ……。そして、暖かい……）
こんなこと、しちゃいけない。もう止めなきゃいけない。
そう思っても、既にそのきっかけを失っていた。胸に触れた手を、離すことができない。
――と、
「え……？」
不意に、さおりが目を開いた。
ほんの十センチほどの距離で、徹と正面から目が合う。
徹は動けなかった。身体が凍り付いたかのように。

「……え？」
そのままさおりは、きっかり五秒間、目を瞬き、そして――
「きゃあああぁぁぁっっっっ――――――!!」
肺の中の空気をすべて吐き出した悲鳴が、徹の耳をつんざいた。
その声で硬直を解かれ、あわてて手を引っ込める。
弾けるように起きあがったさおりは、部屋の隅まで飛び退くと、壁を背にして両手で胸を覆った。
「ちょ、ちょっとっ!!　な、なにしてたのよっ!?」
「な、な、なにって……べ、別に……その……」
真っ青になったな徹の顔に、冷や汗が滲む。
「やだ！　もうっ!!　……信じらンないっ!!」
目にいっぱいの涙を浮かべてさおりは叫んだ。
あふれた涙が一筋、頬を伝う。
徹の胸を貫いたのは怒りの声ではなく、その涙だった。さおりの涙を見て、自分のしたことの重大さを悟った。
胸が痛い。
好きな女の子を泣かせることが、こんなにも辛いことだなんて……知らなかった。
「……いや……あの……俺は……その……」
徹はしどろもどろに弁解を試みるが、言い訳のしようなどあるはずもない。
「……ひどい!!　ひどいよ、こんな……信じらンないっ!!」
さおりの目から、涙が止めどもなくあふれる。
「……ごめん」
「スケベッ!!　変態っ!!　……大っ嫌いっ!!」
力いっぱい叫ぶと、さおりは居間から飛び出した。
「あ……待って！」
徹が制止する間もなく、
バタンッ!!
玄関の扉を叩きつける音が聞こえた。
「月城っ!!」
徹はそのあとを追うが、あわてていたので靴を履くのに手間取ってしまう。さおりは靴も履かずに飛び出したらしい。
ずいぶん遅れて外に出た。外はもう真っ暗で、さおりの姿は見あたらない。

「月城……？　まさか！」
周囲を見回していた徹は、はっと気付いて空を見上げた。一瞬、月と重なったシルエットが見えた。
大きな翼の影が。
「月城！」
さおりのあとを追って、徹は走り出した。

＊

「たしか……こっちの方へ行ったように見えたんだけど……」
息を切らした徹がたどり着いたのは、昨夜さおりと会った公園の展望台。
月明かりの下でかすかに見えた影は、ここへ向かっているように見えた。
しかし、見える範囲にさおりの姿はない。昨夜同様、徹の他に人影は見当たらなかった。
（いや……）
徹は耳を澄ました。かすかな音が聞こえる。
キィ……、キィ……
かすかに聞こえる、金属のこすれ合う音。公園のブランコの音だ。
徹は音の方へと走り出す。
だが、そこにいたのはさおりではなかった。
もっと小さな、小学生くらいの女の子がブランコを揺らしていた。茶色がかった髪をショートカットにした、ややボーイッシュな女の子。
住宅街からこの展望台まで、ちょっとした急な上り坂になっているためか、街の夜景を見下ろせる場所であるにもかかわらず、夜の公園に人がいるのは珍しい。それも、小学生の女の子がひとりきりでいるとなればなおさらのこと。
とはいえ、いまの徹にはその不自然さに気付く余裕もなかった。
「ねぇ……君」
肩で息をしながら、ブランコの女の子に話しかける。
「こっちの方に、羽……いや、中学生くらいの女の子が来なかった？」
思わず「羽根の生えた女の子が飛んでこなかった？」と聞きそうになったが、もちろんそんなわ

けにはいかない。
少女はなにも聞こえなかったかのように、そのままブランコを揺らし続けている。
何秒か待って、徹がもう一度口を開きかけたとき、少女はブランコの勢いを利用してぽーんと飛ぶと、徹の前に着地した。
上目づかいに徹の顔を見て、
「中学生くらいの女の人？　見たかもしれない。どんな人？」
にこっと笑いながら言う。
多分、十歳くらいだろう。その割に、どことなく大人びた口調だった。
「えっと……髪がこのくらいで……白いワンピースを着ていて……そして……」
身振り手振りをまじえて説明する。なにしろ、いちばん目立つ特徴は言うに言えないのだから。
「そして？」
そんな徹の様子を見て、少女は悪戯な笑みを浮かべた。
「たとえば、背中にこんな羽根があるとか？」
「――っ!!」
いつの間にか、少女の顔は徹の目線と同じ高さにあった。
そして、足は地面から離れていた。
月の光の下で真珠のように光る、さおりのものよりやや小振りな翼を広げて――少女は宙に浮いていた。
「き、き、君は……」
あわてふためく徹を無視して、少女が片手を上げた。まっすぐに、徹の背後の森を指差す。街の南に連なる山々へと続いている森を。
徹は後ろを振り返る。
「さがしている女の人は、森の中だよ」
どことなく笑いをこらえているような様子で、少女がささやく。
「このまま、まっすぐいけばいいの」
見ると、少女が指差す先には登山道のような細い道があった。その道を行けというのだろうか。
「よし！　ありがと……」
森に向かって駆けだそうとした徹は、しかしはたと立ち止まって振り向いた。
「君は……？　いったい……？」

さおりの他にも翼を持つ少女がいるということの重大さに、ようやく気付く。
しかしそこには、もう少女の姿はなかった。きょろきょろと周囲を見回していると、どこからともなく声だけが聞こえてくる。
静かな声。森の中を吹き抜ける風を思わせる、優しい声。直接、胸の中に響くように。
「つれて帰るなら、いそがないとね。月がしずむまで……だよ」
その声にはっとして、空を見上げる。
月は既に、天頂まで昇っている。
「ほら、いそがないと……」
その声に促されるように、徹は走り出した。
森の中の小径へと入っていく。十六夜の月に照らされ、足元に不安はない。
しかし――
やはり、あわてていたのだろう。そうでなければ気付いたはずだ。
小さな子供の頃から、この公園にはしょっちゅう遊びに来ていたし、最近では飼い犬の散歩コースなのに。
森の中へ入るこんな小径の存在を、徹は知らなかった。

＊

徹は、森の中を走りつづけていた。
どこをどう走っているのかもわからず、ただ闇雲に。
木の根や下草に足を取られて、何度も転んだ。手や顔を擦りむいても、気にもとめずに。
樹々がうっそうと繁った、深い森だった。しかし不思議なことに、月明かりは木の葉にさえぎられることもなく、森の中を照らしている。
何十分か、それとも何時間かわからないが、森の中をさまよっているうちに、徹も気づきはじめていた。ここが、彼の知る普通の森ではないことに。
奏珠別の近くの山では見ることのできない大樹。
見慣れない形の草木。
月明かりの下で、淡い光を放つ不思議な花。

そして……
時折、周囲でなにかの気配がする。
生き物の気配……獣や鳥ではない。そして、さおりでもない。なぜかそれだけはわかる。
小さな声が聞こえてくる。
『ほらほら、いそがないと間に合わないわよ』
くすくすと笑う声。
『月が沈んじゃったら、手遅れだからね』
からかうような声。
『それまでに彼女は見つかるかしら』
いくつもの声。
『見つかっても、帰らないって言うかもよ』
そんな声を無視して、聞こえないふりをして、徹は森の中をさまよっていた。
ただひとりの相手を捜して。
時折、樹々の間にちらちらと見える姿も無視して。
それは、掌に乗るくらいの小さな少女たち。
蜻蛉(かげろう)のような、透明な羽根を持った。
森の中を漂うように飛ぶ、不思議な少女たち。
徹の姿を見かけると、こちらを指差して仲間同士でくすくすと笑っている。
(なんだろう……あれは……)
聞こえないふり、見えないふりをしていたが、もちろんちゃんと気付いていた。常識では考えられない、この不思議な存在に。
(妖精……? 幻想の世界の住人……)
普通の人間に、羽根なんて生えているはずもない。
ブランコのところで会った少女も。
この、蜻蛉のような少女たちも。
みな、徹が住むのとは別の世界の住人なのだ。
ファンタジー小説が好きな徹は、容易にその考えを受け入れることができた。月城みさとの小説に登場するような、妖精たちの世界。
そして……
さおりも?
先刻の少女の言葉を思い出す。
『つれて帰るなら、いそがないとね……』
連れて帰る……? どこから、どこへ?
『見つかっても、帰らないって言うかもよ』
急に、不吉な予感にとらわれる。

もちろん、さおりが普通の人間であるはずがない。むしろ〝こちら側〟の存在なのかもしれない。
この森こそが、さおりのいるべき世界なのかもしれない。
（まさか……、もう戻らない……？）
「冗談じゃない！」
もうへとへとに疲れていたが、それでも徹は走り続けた。
さおりを捜して。
どのくらい走り回っただろう。すでに時間の感覚はない。
そうして、さすがに力尽きかけた頃、ひときわ高い樹の梢近くの枝に座っている、少女の姿を見つけた。
「……！」
美しい羽根はそのままだった。それは、淡い光を放っているようにすら見える。
徹は、樹の下まで来て見上げた。
大きく息を吸い込むと、恐る恐る声をかける。
「……月城」
なんの反応もない。まっすぐに前を見ているだけ。
徹に気付いた素振りすらない。
「月城……」
もう少し大きな声で呼びかけると、がばっとその場に土下座した。
「ごめん！　悪かった！　謝るから!!」
さおりは無表情に、ただ前を見ている。
「ホントにごめん！　あれはほんの出来心で……もうしないから!!」
それでも、ただ黙って高い樹の枝に座っているだけ。徹の声などまったく聞こえていないかのように。
月明かりの中に白く浮かび上がるその姿は、まるで、そのまま光の中に溶けこんでしまうのでは……と思われるほど、はかなげに見えた。
「ほんっと～に悪かった！　頼むから、話を聞いてくれよ!!」
徹は必死に訴える。なんとしても、聞いてもらわなければならない。戻ってきてもらわなければならない。そうしなければ、もう二度とさおりに会えないのではないか――そんな気がした。

「悪かったよ！　でも、月城の寝顔がすごく可愛くて……つい……」
徹の顔が、わずかに赤くなる。
「……だって、好きな女の子が目の前で無防備に寝てるんだもの。つい、いたずらしたくなって……。ゴメン、もうしない！」
ぴくり。
はじめて、さおりが反応した。
ゆっくりと顔を動かし、徹を見おろす。
「月城……」
地面に両手をついたまま、徹は上を見る。
月明かりの下だし距離もあるので、さおりの表情はよくわからない。どことなく、怒っているようにも見えた。
「……神山って、あたしのこと好きなの？」
あまり感情のこもらない声だった。
あらたまって訊かれるとやっぱり恥ずかしく、徹の顔がいっそう赤みを増す。しかし、きちんと言わなければならない。
「好きだ。俺、月城のことが好きだ。本当だよ!!」
「どうして？　あたしなんかを……？」
どこか戸惑いがちな、小さな声。
「だって、月城ってとっても可愛いじゃないか」
「……うそ」
「嘘じゃないって!!　ホントに、月城ってすごく可愛くて、大好きだ。一緒にいると楽しいし、料理も上手だし……。だから……こっちに戻ってきてくれよ!!」
さおりは、まっすぐに徹を見ていた。まだ少し怒ったような表情をしている。
それでも、その表情がいくぶんやわらいできたように見えるのは気のせいだろうか。
不意に、三十メートルはありそうな樹の上から飛び降りた。
翼をいっぱいに広げ、徹から五メートルほど離れた地面にふわりと着地する。
美しい翼を閉じると、それは背中に吸い込まれるかのように消えた。
「月城！」
駆け寄ろうとした徹を、さおりは片手を上げて制止した。怒っている……わけではなさそうだが、けっして愛想のいい表情でもない。

「月城……」
「もう、エッチなことしないって、約束する？」
普段よりほんの少し低い声で訊いた。
「もちろん！　あ、いや……え～と……」
徹はきっぱりと断言しかけて、しかし、語尾がだんだん小さくなる。
口だけで約束するのは簡単だ。だけど、それでは決して徹の本心にはならない。
許してもらわなければならない。しかし、だからといってさおりに嘘をつきたくなかった。
「あ……え～と……その、そのときは月城の許可をもらうって約束する」
「……？」
訝しげに首をかしげるさおりに向かって、徹は言葉を続けた。
「その……、そ～ゆ～ことしたくないって言ったら嘘になる。でも、もうあんなことは絶対にしない。月城がいいって言わないかぎり、絶対に変なことしない」
やや警戒したように、さおりは一、二歩後ろに下がる。

「神山って……、ひょっとしてすごくエッチなの？」
「え？　いや、そんなことない……と思う」
後半、なんだか自信なさげな台詞だった。それだけでは言葉が足りないと思い、なんとかフォローしようとする。
「普通……だと思う。ほら、好きな女の子を前にして、健康な男子ならちょっとくらいエッチなことも考えるのが普通だろ？　でも、信じて。絶対に月城がいやがることはしないから!!」
身勝手な台詞かもしれない。自分でもそう思いつつ、徹は必死に訴える。そんな様子をまだ怒ったように見ていたさおりだったが、やがて、その必死なそぶりがおかしくなったのか、ぷっと小さく吹きだした。
「……言っとくけど、あたしまだ怒ってるんだからね」
笑いをこらえつつ、無理に怒っているふりをする。
「いくら頼んだって、ぜったいにそんなこと許さないんだから」

「わかってる。ほんっと～にごめんなさい!!」
徹はもう一度、地面にこすりつけるように頭を下げた。
「ホントに、あたしのこと好きなの？」
「好きだ！　だから……その……正式に俺と付き合ってほしい！」
これ以上はないというくらい真っ赤な顔で徹が言う。
そして、言われたさおりも同じくらい真っ赤になっていた。男の子から、こんな告白をされたのは初めてだったから。
赤い顔を見られたくないかのように、そっぽを向いてわざと素っ気なく応えた。
「……考えとく。先刻のことは……今回だけ勘弁してあげる」
徹の表情がぱっと明るくなった。
「は、早合点しないでよ。神山と付き合うって決めたわけじゃないからね。ただ、考えておくって言っただけなんだから」
それでも徹は、安堵の息をついた。ふぅっと、大きく息を吐き出す。

「わかってるよ。でも……安心した。あのまま、もう戻ってこないんじゃないかって心配したんだ」
「戻ってこないって……どうして、そんなこと思うの？」
「だって……気付いてる？　ここが、俺たちの知ってる奏朱別（そうしゅべつ）の近くの山じゃないってこと……」
徹は、さおりを捜している間に見たものの話をした。
走り回っている間に何度も見かけた妖精たち。見たこともないほどの大樹。月明かりの下で咲く不思議な花々。
徹は確信していた。ここは、彼がいたのとは少し違う世界だ。知らないうちに、妖精の輪に足を踏み入れてしまったのかもしれない。
塀の向こう側の世界――そんな、以前なにかの本で読んだ表現を思い出す。それは、ごく身近にありながら、それでいてどこか違う空間。幻想の世界の住人たちが住む世界。
「……だから、月城ってホントはこの世界の住人なんじゃないのかなぁって」

「そうね、そうかもね……」
さおりもゆっくりとうなずいた。
「あたしも見た。同じように、羽根を持った女の子。ひょっとしたら、ここの方があたしにはふさわしい場所なのかも……」
どこか寂しげな口調だった。徹ははっとしてさおりを見る。
「月城……」
「……でもね」
小さく微笑んで顔を上げる。
「神山がどう考えてるのか知らないけど、あたしは、一昨日まで自分のことをごく普通の女の子だと思ってたの。あたしはあの街で生まれ育ったんだもの。他に帰るところなんてないよ」
「そ、そうか……そうだよな」
安心した様子で徹は立ち上がり、ジーンズについた土や草をはらい落とす。
「じゃ、帰ろうか。送ってく」
「うん」
さおりも立ち上がった。
「……で、街はどっち？」

「え……？」
「……」
その場が気まずい沈黙に包まれた。ふたりは顔を見合わせる。
周囲には同じような森が広がり、どこから来たのかもわからない。
「え～と……」
「……ひょっとして……迷った？」
額に冷や汗が浮かぶ。
「あ……ははは……」
「笑い事じゃないって！」
笑ってごまかそうとした徹は、さおりにきつい目で睨まれて口をつぐんだ。だが、
「そうだ！」
急に明るい表情になって、ぽんと手を叩く。
「月城が飛んでけばいいじゃん！　空からなら、街の方角もわかるだろ？」
「そうか！　神山って見かけによらず頭いいね」
「見かけによらず、は余計だよ」
口をとがらせて反論する徹は無視して、さおりは上を向いた。目を閉じて、静かに両腕を広げる。

そして……
「……あれ？」
「どうしたの？」
「羽根が……」
さおりは自分の背中を振り返った。
「……出てこない」
どうしたというのだろう。一昨日からずっと、意識して抑えていなければ勝手に出てくるほどだったのに。
なにも難しいことはなかった。ただ、翼を生やした姿を思い浮かべればいいだけだった。
「どうして？」
「……わかんない」
「ってことは、飛べなくなったってこと？」
「……そう……みたい。どうして急に……」
さおりは心細げに言う。
なにげなく空を見上げた徹は、はっと気付いた。公園にいた少女や、妖精たちの言葉を思い出す。
『つれて帰るなら、いそがないとね……。月がしずむまでだよ』
『ほらほら、いそがないと間に合わないわよ』
『月が沈んじゃったら、手遅れだからね』
もう一度確かめるように、空を見渡す。
いつの間に、そんなに時間が過ぎてしまったのだろう。月は、すっかり西の山陰に隠れていた。
「あ……なんてこった……」
思わず、頭を抱えてその場に座り込む。
「どうしたの？」
さおりも隣にしゃがんで、顔をのぞき込んだ。
徹は説明した。さおりを見つけるまでに、見たもの、聞いたもののことを。
ここはおそらく、ふたりが住む世界とはちょっと違った空間なのだ。あの、妖精のような生きものが実在する、幻想の世界。月城みさとの小説に描かれるているような。
ふたりは、そこに迷い込んでしまったのだ。あの言葉……「月がしずむまで」がキーワードだった。
「きっと、月が出ている間だけ、道がつながるんじゃないのかな。ほら、月の光には魔力があるって、よく言うだろ」
「じゃあ……じゃあ……もう、帰れないの？」

「……かもね」
「そんな……！」
青ざめるさおりの目に、涙が浮かぶ。徹はあわてて立ち上がった。
「し、心配しなくてもいいよ。俺がついてるんだし……ふたりなら、少しは心強いだろ」
「だって……」
「大丈夫だって」
実をいえば彼も不安ではあったが、それでもまだ、女の子の前でカッコつけようとするだけの余裕は残っていた。たとえそれがやせ我慢であっても。
「えっと……、あ、そうだ！」
なんとかさおりを元気づけたい、必死に考える徹は、ひとつの希望を見つけた。
「もしかしたら、明日の夜にまた月が昇ったら、帰れるんじゃないかな？」
「……もし、ダメだったら？」
さおりが涙目で徹を見る。
「そのときはそのときさ。まだ可能性があるうちは、そんな悲観的な顔してちゃダメだよ」

内心「泣いている顔も可愛い」なんてことを考えてはいたが、でもやっぱり笑っている顔がいちばんいい。
「神山は不安じゃないの？　もしも、もう二度と家に帰れなかったら……って」
「どうしてかな、あんまり不安じゃない。きっと、月城と一緒にいるからかな」
キザな台詞を口にしてしまった、と自分でも思う。さおりの頬がぽっと赤く染まった。
「あ、あたし、そんなに楽天的になれないよ」
「ま、いいさ。ちょっと休もうよ。俺、ずっと走り通しだったから疲れた」
できるだけ気楽そうに言って、すぐそばの大木の根元に腰を下ろした。
実際のところ、徹はもうくたくただった。体力的にも、そして精神的にもずいぶん消耗している。深刻に落ち込むだけの元気もなかったというのが正直なところだ。ひと眠りして頭がすっきりすれば、なにかいい考えが浮かぶかもしれない――そう考えた。
「また妖精たちに会えたら道を聞けるかもしれな

いし、きっとなんとかなるよ」
樹の幹に寄りかかって目をつぶった徹は、眠そうな声で言った。
「ん……」
少し間を空けて、さおりも腰を下ろす。もう夜中どころか明け方が近い時刻だ。楽な姿勢になると、とたんに眠くなってくる。
それでも、さおりは簡単には寝付けなかった。
「……帰れなかったら、どうしよう……」
「そんなこと考えちゃダメだって。とりあえず明るくなったら、道をさがしてみようよ。それがだめなら月が昇るのを待つさ。大丈夫、きっとなんとかなるよ」
「……うん……そうだね……」
さおりも目を閉じる。しばらくそうしていて、しかし、また目を開けて徹を見た。
「……ホントに、いいの？」
主語も目的語もなしに、いきなり訊く。
「なにが？」
うとうとしかけていた徹は、なにを訊かれたのかわからずに、目を閉じたまま聞き返す。
「ホントに、あたしなんかでいいの？　特に美人ってわけじゃないし、それに、こんな羽根の生えた、変な女の子でもいいの？」
徹は目を開いてさおりを見た。思いのほか、真剣な表情をしていた。
だから、わざとふざけた調子で応える。
「その羽根がいいんじゃないか」
「じゃあ羽根がなくなった今のあたしは、なんの魅力もないってこと？」
揚げ足をとられ、あわてて言いなおす。
「そうじゃなくて!!　え～と、そりゃあ、月城の羽根はすごく綺麗だけど、それだけじゃなくて……その……月城自身もとっても可愛くて、だから、羽根は単に月城の魅力の一部分だというだけで、羽根がなくなっても別に……俺、月城のことが好きだ」
もともと徹はあまり口のうまい方ではない。ずいぶんとまだるっこし言い方になってしまったが、それでも言いたいことはなんとか通じただろうと思う。
「……ありがとう」

頬を赤らめながらさおりが微笑んだので安心する。やっぱり、笑っている顔がいちばん可愛い。
「ね、神山……。いいこと教えてあげようか？」
それは、やっと聞き取れるくらいの小さな声だった。
「……あのね、あたしも、神山のこと好きだよ……多分、ね」
今度は徹が赤くなる番だった。照れ隠しに、目をつぶって寝たふりをする。
（やっぱり、可愛いな……）
あの羽根だって、すごく素敵だ。
別に、人間じゃなくたっていい。妖精だろうとなんだろうと……。人間と妖精が恋に落ちる話なんて、民話や小説にいくらでもあることだ。
（そういえば……）
月城みさとのデビュー作が、たしかそんな話ではなかったか。生まれ故郷を離れ、人間の青年と結婚した妖精の物語。
（……！　まさか……）
偶然の一致だろうか。それとも……？
そんなことを考えているうちに、いつしか徹は本当に眠りに落ちていた。

＊

朝の柔らかな陽射しがカーテンの隙間から射しこみ、ベッドの上に光と陰のまだら模様をつくり出している。
「う……ん……」
コーヒーの香りが、まだ半分眠っているさおりの意識をくすぐった。
ぼんやりと目を開ける。
「ん……、あ……れ？」
身体を起こしてまわりを見回す。
自分の部屋だった。自分のベッドの上で、ちゃんと、自分のパジャマを着て寝ている。
「あれ……？」
ぼうっとした頭で考える。なにか、不思議な夢を見ていた気がする……と。
部屋の中を見回す。なにも変わったところはない。机の上の時計は、午前七時少し過ぎを指していた。そろそろ起きないと、学校に遅れてしまう。

のろのろと起きあがると、パジャマのままで部屋を出た。
居間には、ソファに座ってコーヒーカップを片手に新聞を広げている女性の姿があった。
「……ママ？　いつ帰ってきたの？」
「おはよう、さおり。今朝の始発電車よ」
さおりの母親、みさとがこちらを振り返って微笑んだ。
「千歳空港に着いたのは昨夜なんだけどね。千歳で友達と会う約束があったから、そのまま泊まってきたの」
「ふ……ぅん……」
「おみやげのハスカップのパイがあるから、朝ごはんに食べたら？」
「本州に旅行してたのに、どうして千歳空港でおみやげ買ってくるのかなぁ……」
みさとは旅行に行くことが多い。作家である彼女は取材旅行という名目で出かけているのだが、さおりは単なる趣味だろうと思っている。
行く先はそのときによってさまざまなのだが、なぜか、おみやげは北海道内のものが多い。「旅先で買って持ってくるのは重いから」というのがみさとの言い分だった。それなら宅配便で送ればよさそうなものだが、直接手渡すのがおみやげの醍醐味なのだそうだ。よくわからないが、彼女なりのこだわりがあるらしい。
食堂のテーブルについたさおりは、自分のカップにコーヒーを注ぎ、ハスカップパイを一切れ皿に取る。
パイを口に運びながら、昨夜の出来事を考えていた。
（あれぇ……？　夢……？　まさか……でも……）
徹とふたり、森の中で迷って野宿していたはずなのに、どうして自分の家で寝ているのだろう。なにごともなかったかのように。
（夢でも見てた？　でも……いや……いったい、どこからどこまでが夢？）
すべてが夢だった、と考えるのがいちばん自然だった。
さおりの背には、羽根なんて生えていない。どうやっても、そんなもの出てこない。はじめから存在しなかったかのように。

それが当たり前なのだ。背中に魔法の羽根が生えて、それで空を飛び回っていたなんて。常識で考えれば、そんなこと現実にあるはずがない。
（やっぱり、夢？　でも……いや……う～ん……）
フォークを口にくわえたまま、さおりは考え込む。そこで、はたと気付いた。
徹はどうしたのだろう？　彼がなにか知っているのではないだろうか？
ひょっとしたら、眠っているさおりを徹が家まで運んでくれたのかもしれない。可能性は低いが、あり得ない話ではなかった。
（学校に行ったら、訊いてみようか）
でも……羽根のことも、なにもかも夢だったら……。そんなことを訊いたら、変なヤツと思われるのがオチ。
（でも……う～ん……）
朝食の間も、学校の制服に着替えているときもずっと考えつづけて、とりあえず普段より早めに家を出た。
いつも通りの通学路。いつも通りの学校。特になにも変わったところはない。

いつもと同じく、月曜の朝はみんなどことなく眠そうだ。
さおりが教室に入ったとき、徹はまだ来ていなかった。教室の入口近くに立って、徹が登校してくるのを待つ。
しかし徹はなかなか現れず、ようやく姿を見せたのは、もう朝のH・R（ホームルーム）が始まる直前だった。
教室に入ってきた徹と、一瞬目が合う。
「あ……えと、お、おはよう」
昨夜のことを訊いてみたいけれど、どう切り出せばいいのかわからないので、とりあえず朝の挨拶だけ。
「あ……、おはよ……」
やや戸惑った様子で、徹も挨拶を返す。それだけでは、なにもわからない。いきなり声をかけられて戸惑っただけかもしれない。少なくとも先週までは、徹とは特に親しかったわけでもないのだから、当然のことだろう。
（やっぱり、なにも知らないのかな……）
そう考えると、もうなにも言えなくなる。
だから、さおりはそのまま自分の席に戻った。

その日は一日、特に何事もなく過ぎた。
放課後、「街へ遊びに行こう」という友達の誘いを断って、さおりは帰路についた。
とても遊びに行く気分ではない。
結局、徹になにも言えなかったし、彼の方から話しかけてくることもなかった。授業中や休み時間に何度か目が合ったような気がしたが、それはしょっちゅう徹の方を見ていたための偶然かもしれない。
（やっぱり……夢だったのかな……）
あんなに真剣に、好きだと言ってくれたのに。
「……夢、だよね。ホントにそんなことあるわけないもの」
落胆した表情で、自嘲気味につぶやいた。
足どりも重い。
（こんなことなら、みんなと一緒に遊びに行った方が、気が晴れたかな……）
そんなことを考えていたさおりは、校門の手前でふと足を止めた。
ちらほらと下校する生徒が歩いている中にひとり、校門に寄りかかるようにして立っている男子生徒がいる。誰かを待っているかのように。
心臓の鼓動が速くなった。
いま、周囲にさおりの知り合いはない。徹に昨夜のことを訊くなら、これが今日最後のチャンスだった。
でも、どうやって聞けばいいのだろう。さおり自身、時間が経つにつれてあれは夢だったのでは、という思いが強くなっている。だとしたら、そんな馬鹿なことを聞くのは恥ずかしい。
（……偶然よね。きっと友達を待ってるんだわ）
それでも校門が近づくにつれ、さおりの歩みはだんだん遅くなる。
徹がちらりとこちらを見たような気がして、思わず立ち止まってしまった。
目が合って、頬がか～っと熱くなる。
「あ、あのね」
「……あのさ」
ふたりが口を開いたのはほとんど同時だった。
一瞬、おやっという表情でお互いに顔を見合わす。
「え……と……、あたしに用？」

「俺になにか……？」
また台詞がかぶって、ふたりそろって小さく吹き出した。
「神山から、言いなよ」
「月城から言えよ」
「……じゃあ、一緒に言おう」
さおりの言葉に徹もうなずいた。一、二の三で、タイミングを合わせて、
「一緒に、帰らない？」
ふたりで、同じことを言った。
驚いたように相手を見つめる。
赤い顔をして。十秒くらいそうしていて、
「……いいよ」
やっぱり、ふたり同時に答えた。
口もとに、かすかな笑みを浮かべて。
「じゃ、行こっか」
どちらからともなく言いだして、ふたりは並んで歩き出した。

この日はちょっと寄り道をして、一緒にお茶を飲んで帰ったのだが、さおりは結局、昨日までのことはなにも訊かなかったし、徹も、なにも言わなかった。
でも、それでもいいと思う。
徹と仲良くなれた、いまこうしていることは間違いなく現実だったから。

エピローグ

それから一ヶ月近くが過ぎた日の夕方、学校帰りのさおりと徹は、奏珠別（そうしゅべつ）公園の展望台で寄り道をしていた。

街を見おろす高台にある小さな公園は、ふたりのお気に入りの場所だった。急な坂を登らなければならないため、ここはいつ来ても人が少なく、だから、ふたりでいてもクラスメイトに冷やかされる心配もない。

今日も、いつもと同じように、鬼ごっこをして遊んでいた小学生たちが帰ったあとは、公園にいるのはふたりだけになった。

陽が沈んであたりが薄暗くなりはじめた頃、東の山の陰から、ややオレンジ色がかった大きな月が顔を出した。満月にはまだほんの少し足りない月。

ふたりは公園の柵に寄りかかって、昇ったばかりの大きな月と、灯りはじめた街の明かりを眺めていた。こうして徹とふたり、他愛もない話をしている時間がさおりのお気に入りだった。

なんとなくいい雰囲気で、時が静かに流れる。ずっとこうしていられたらいいな、なんて思っていると、

「……あのさ、月城……」

ためらいがちに、徹が口を開いた。

「なに？」

「その……え……と……」

柄にもなく緊張している様子だった。それが伝染して、さおりの鼓動も少し速くなる。

徹は大きく深呼吸して、言った。

「……キス、しても……いい？」

「……え？」

さおりの鼓動がひときわ大きくなる。

思わず、周囲を見回した。公園の中には誰もいない。さおりと徹の、ふたりだけ。

頬が熱くなる。

断る理由はなかった。年頃の女の子の常として、さおりももちろん好きな男の子とのファーストキスには憧れがある。たまに空想するその場面で、その相手はいま彼女の隣にいる少年だった。

付き合いはじめて一月という時間が長いのか短

いのか、それはわからなかったが、それでも断る理由はなかった。
「ん……」
口ではっきり「いいよ」と答えるのもなんだか恥ずかしくて、さおりは身体を徹に向けると、軽く上を向いて目を閉じた。
徹の手が肩に触れた瞬間、ぴくっと身体が震える。徹の体温が近づいてくるのを感じる。
（うわぁ……、すごくドキドキする……）
特に理由のない不安が半分、そして期待が半分、といったところか。しかし……
（あ、ヤダ、どうしよう……）
こんな大事な場面で間の抜けた話だったが、くしゃみが出そうだった。
「くしゃみが出そうだから、ちょっと待って」なんて言えるはずがない。せっかくのいい雰囲気が台なしだ。
（なんとか、我慢しないと……）
そうは思ったものの、それは無駄な抵抗だった。
「……っ、くしゅんっ!!」
びくっと、徹の動きが止まる。あと数センチで唇が触れそうなところだったのに。
「……ご、ごめんなさい！」
あわてて口を押さえて謝った。どっちにしろ、雰囲気はぶちこわしに違いない。
徹は、驚いたように目を丸く見開いている。
「……あの、急に鼻がムズムズして……我慢しようとしたんだけど……。ごめんなさい！　わざとじゃないからね！」
「いや……それはいいんだけどさ……」
特に気を悪くした様子はないが、しかし、奇妙な表情でさおりのことを見ている。
「くしゃみはどうでもいいんだけど……、それ……？」
「え？」
さおりの背後を指差している。首をめぐらして、徹が指差すものを見ようとして……。
驚きのあまり、息をのんだ。
「うそ……」
純白の、大きな翼が広がっていた。
一ヶ月前となにも変わらずに。昇ったばかりの月の光を受けて、真珠色の輝きをまとっている。

さおりは両手で口を押さえて、徹の方に向き直った。
驚きと、戸惑いと、そして喜びの入り混じった表情。ふたりそろって、そんな顔をしていた。
しばらく、そのままお互いを見つめ合って、
「はは……」
「ふふ……」
「あは……ははは……」
ふたりは同時に笑い出した。はじめは遠慮がちに、やがて抑えきれずにお腹を抱えて爆笑する。目に涙すら浮かべて。
他に誰もいない夜の公園に、ふたりの笑い声だけがいつまでも響いていた。

同じ頃、さおりの家では――
母親のみさとが、執筆の手を休めて部屋の窓から月を眺めていた。
「きれいな月ね……先月と一緒」
なにか面白いことを思いだしたかのようにくすくすと笑って、自分の手を見る。彼女の指は、一枚の小さな羽毛を摘んでいた。

それは、月の光の中で真珠のような輝きを放つ、純白の羽根だった。
自称「ティーンの少女たちの間で大人気のファンタジー作家」月城みさと。人間の青年と恋に落ちた妖精を描いた彼女のデビュー作が、自身の体験であるということは誰も知らない。

〈終わり〉

閲覧に関する注意事項

このＰＤＦファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

●モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Ｅｎｔｅｒキー（Ｒｅｔｕｒｎキー）で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合（１２８０×１０２４以上）、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、１ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの方が適しているかもしれません。（その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです）どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

●印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはＢ５を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「２ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれません。（縮小してＢ６用紙に印刷するのでも可）

アクロバットのバージョンが４の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われますのでご了承ください。